

岩井健作の宣教思想と霊性

—教会と平和運動の形成—

大 倉 一 郎

1. 岩井健作のキリスト教宣教をめぐる一本稿の課題と目的—

岩井健作は日本基督教団（以下、教団）牧師として戦後48年間に渡って、広島県、山口県、兵庫県、神奈川県など日本各地の教会で宣教・牧会に携わったキリスト者である。岩井は牧師であった父の岩井文男⁽¹⁾の志を継ぐことを望んで同志社大学神学部に入学し、同大学院神学研究科修士課程を修了した後、1965年の広島流川教会に始まり、呉山手教会、岩国教会と教団西中国教区の三つの教会に働き、続いて教団兵庫教区神戸教会、教団神奈川教区川和教会、最後に単立明治学院教会（横浜市）に至るまで六教会に牧師として働いた。明治学院教会を2013年に退任して現役を退いた。各個教会の牧師としての働きに並行して、教会付属幼稚園園長を長く勤め、広島女学院大学、聖和大学などキリスト教系大学の非常勤講師、教団常議員、兵庫教区総会議長などの役職も担った。

岩井はとりわけ平和問題に関わる社会運動に終始関心を注ぎ、実践活動と発信に取り組み続けた。岩井は大学院修了後に伝道師として最初に赴任した広島流川教会での宣教活動の始めからキリスト者平和運動に参加し、次の任地の呉山手教会牧師としても平和運動に積極的に参加し、その後に赴任した岩国教会でも牧師として働きながら岩国米軍基地反対

闘争に取り組み、その取り組みの経験や思索から数多くの発信を試みた。岩国での運動を通じて、岩井の取り組みは、キリスト教会の枠組みや社会運動における既存の党派的革新運動の枠をさらに超えていった。また、沖縄の人々の米軍基地撤廃闘争への連帯など、戦後の日米安保体制に抗した人々の広範で多様な闘いに、社会的分断を超える方向を模索しながら彼の視野や人々とのネットワークを広げていった。岩井は、それらの活動の中で教会の戦争責任の問題に対する認識を深めていった。このような岩井の社会運動的宣教の姿勢は、彼の宣教活動の後半期になる神戸教会牧師、川和教会牧師、最後の任地となった明治学院教会牧師の時代にも一貫して持続していった⁽²⁾。

岩井は平和運動への関与をどのようなキリスト者としての自己形成と視座に根ざして、半世紀にも及ぶ積極的、かつ持続的な実践として一貫し得たのであろうか。残されている岩井の数多くの言説は、その都度直面した問題に即して発信されてきた言説なので、一見すれば断片的にも見える。他方、平和問題にかかわる岩井の半世紀の活動と言説から窺えるのは、岩井が平和問題との取り組みを終始一貫して教会の宣教活動として捉えようと模索していた事実である。この点に注目すれば、岩井の言説を時々刻々に個別の課題に即応したキリスト者一個人の社会運動に関わる言説としてだけ見るのは不十分であることが分かる。むしろ、岩井の営みは、キリスト教会の宣教に関わる言説、しかも、戦後平和運動への参与の経験を通じて形成された教会の現場からの宣教の思想と霊性の営みとして捉える、という視座がそこに成立するだろう。

岩井は平和運動を担うことを教会共同体の形成と切り離せない課題であるという視座に立って捉えた。第二次世界大戦の反省を動機として始まった戦後の平和運動の取り組みの中に、戦後社会における教会の存在意義に関わる宣教の課題を認めて積極的に参加したのである。岩井はその平和運動への取り組みを教会の形成に不可分に結びつく宣教の事柄

として位置づけようと試みた。それゆえ教会に向かって平和に関わる社会的活動を宣教の不可欠の責務として見る視座から、キリスト者の然るべき関心と行動への参与を粘り強く促し続けた。その軌跡を振り返るならば、岩井は戦後の教団において平和運動と教会との新たな関係を模索して、教会の宣教を歴史的・社会的な反省に立った実践として再形成しようと息長く取り組んだ戦後プロテスタント宣教者を代表する牧師の一人であるといえるだろう。

岩井がその宣教活動を通じて戦後キリスト者と教団教会が担う必要を認めた根本的な課題は、岩井にとって大きく三つ存在したと思われる。第一にキリスト者、あるいは教会は、平和の構築のための「国民的」闘いにどのように参加するのかという課題であった。岩井にとって平和の構築は敗戦後日本の「国民的」課題であって一宗教者や一教団のみの直面する課題ではなかった。その理解にたてば、その「国民的」闘いの形態がどのようなものであるべきかを模索することが重要になる。第二にそこに平和のために市民的連帯をなし得る教会をどのように形成するかという課題が現れる。つまり社会運動に開かれた教会の共同性の形成という課題であった。岩井は、その出発点は戦争責任を担い得る共同体としての教会形成をめざすことであると考えた。第三に彼が重視した課題は、教団の歴史を踏まえた正統主義的信仰告白の教會的位置づけに対する批判的捉え直しであった。それは開かれた共同性を形成するための靈性の在り方を模索する試みだったといえるだろう。

以上のような課題をめぐって形成された岩井の宣教思想と靈性は、広島流川教会、呉山手教会、そして岩国教会と、岩井の牧師時代前半期におけるキリスト者平和運動、反米軍基地運動に積極的に参加した18年間余りの実践と思索を通じて、その基本的性格が形成されたと思われる。それゆえ、本稿は、岩井の西中国教区での牧師時代を社会運動への参加を主体的に志向する彼の宣教思想と靈性の基本的性格を形づくった

形成期と捉えて、その性格の理解、そしてそれが持つ宣教史的意義を明らかにすることを目的とする。ところで、岩井の思想と霊性の形成は必ずしも直線的ではなく、同一課題をめぐって実践と自省とを反復しながら円環的かつ連続的に形成していくという特色を認めうる。そのため本稿は、考察の上で必要な場合には、西中国教区以後の岩井の宣教の実践と言説をも参照してテーマへの接近を試みることにする⁽³⁾。

2. 岩井健作の人と歩み

2-1. 農村体験と「教会と社会」を問う信仰

岩井健作は1933年8月1日、岩井文男と牧江夫妻の五人の子どもの二男として、岐阜県関市に生まれた。父の岩井文男は、賀川豊彦の農民伝道の提唱に呼応して敗戦後の一時期を農村開拓自給伝道の牧師となって岐阜県加茂郡坂祝村（現坂祝町）の農村に入り伝道に携わった。しかし、岩井文男の農村伝道は厳しい貧窮の生活を余儀なくされたといわれる。戦後を迎えると一家は米国のキリスト教徒たちの援助で送られた山羊の乳などを貴重な栄養源にし、中学生・高校生時代だった健作もその山羊の世話をするなど農作業を手伝い、また日曜学校などの教会の活動に参加しながら、農村の豊かな自然と農民の厳しい生活を身近に体験した。そのような生活は、岩井健作にとって社会への強い関心と平和への志向をもってキリスト教を考え、聖書を読む姿勢を身に付ける原体験の場になったであろう⁽⁴⁾。当時の農民の生活の厳しさを間近に知り、その中でも自然の美や豊かな力に驚嘆し収穫の恵みに感謝する感性を養ったという岩井の体験を考慮すれば、その体験を基盤として岩井の創造論的信仰と終末論的信仰が培われたと見ることができる。その信仰の傾向と結びついて岩井の現実社会と歴史への強い知的関心が醸成されたと思われる。

岩井は1946年、中学校一年生の時に坂祝教会で洗礼を受けた。坂祝教会は賀川豊彦の農民福音学校運動の系譜の教会であり、岩井のキリスト教信仰はその坂祝教会の精神性と前述の農村生活の体験の中に育まれた。後年の回想において、岩井は賀川の農民福音学校運動における福音理解の根底に『農民と生きる』ことがありました。それは当然私の後の「教会と社会」という問題意識に連続します」（岩井2007体感としての右傾化とキリスト教p.30）と語っている。

2-2. 平和運動・赤岩栄・教会

岩井は、1952年、同志社大学神学部に入學し、1958年の大学院修了まで、ほぼ1950年代を通じて同志社に学ぶことになった。1950年代は日本社会が戦後体制の急速な右傾化に踏み込んでいく時代であった。同志社時代の岩井はその右傾化の時代状況に対して敏感に反応していった。

岩井が直面した右傾化の状況はどのような展開をしていたのであろうか。政治学者林博史は、かつての戦争指導勢力とその責任を免罪する占領米軍の政治的意志が働いて展開した点に注目している（林 2012 pp.134-143）。すなわち、戦後いち早く昭和天皇の戦争指導者としての責任は免罪されていた。さらに生物細菌兵器の情報と引き換えに七三一部隊の責任者も免罪され、中国における毒ガス兵器使用や諸都市無差別空襲などの戦争犯罪の責任も問われることなく免罪されていた。1950年に朝鮮戦争が勃発し、米ソ両陣営の代理戦争の色彩を帯びて東西対立は厳しさを示し、日本国内ではすでに始まっていた東京裁判による戦犯の免罪と米軍基地の形成が急速に進行していった。戦後占領軍を主導した米軍によって、1952年、前年のサンフランシスコ講和条約で独立を回復した日本政府は、巣鴨刑務所の戦犯の釈放と復権に取り組み、1957年、自らも元A級戦犯であった岸信介が首相に就任すると、一挙

に戦犯の復権を推し進めた。

林は以上のような戦争責任者を免罪して復権を図る動きは、日本の保守勢力の要求であるとともに、東西対立に備えた米国のアジア軍事戦略に拠っていた側面を指摘する。すなわち米軍はアジアでの軍事行動の自由を確保する目的から、戦後初期に進めた日本の政治的民主化と軍国主義解体のための非軍事化路線を転換して、戦犯を含む親米保守勢力の保持と米軍基地の確保を最優先にしたのである。林の指摘が意味することは、米軍基地体制の確立を目指した戦後の政治の動きは、日本の国民的意識が、後に戦争責任問題として問い直される課題に対して容易に覚醒しない状況に大きな影響力となったことを説明しているといえるだろう。

もっとも、1950年代当時は、右傾化と再軍備と米軍基地の問題は、必ずしも戦争責任の問題と関連して受けとめられてはいなかった。むしろ、いまだ戦争の記憶の生々しい日本国民の間には、再度の戦争と政治的抑圧への反射的な危機感が一挙に高まり、平和運動・反軍事基地運動を通して親米保守政府に抵抗する闘いが日本各地に生まれていったのである。それら50年代の運動はもっぱら革新政党・労働組合などの主導のもとにあったが、徐々に既存の枠組みに留まらない、学生・市民・宗教者などを含む多様な市民層への広がりを示し始めていたのである。

岩井はこのような右傾化と再軍備の50年代の時代状況に抵抗して積極的に同志社大学における学生の運動に加わった一人であった。また、当時の同志社大学神学部は、寛容なりベラリズムの校風を培っていたので、岩井のような社会的関心を抱いた学生が比較的自由に活動することが可能な場でもあった。岩井は当時を回顧して次のように語っている。「農村伝道への志を心の片隅に抱きながら、僕は同志社神学部に進んだ。大学は『全学連』の主導の下で学生運動が盛んであった。高校時代に農村と都市との経済の二重構造や朝鮮戦争以来、右傾化した保守政治の中、

尊敬していた高校社会科教師がレッドパージで追放された体験がきっかけにあり、京都では『破壊活動防止法案反対闘争』など学生の政治闘争に加わり、キリスト者平和の会に参加した」（岩井2007体感としての右傾化とキリスト教 p.15）。

岩井が参加したキリスト者平和の会の運動もまた、先述のような再度の戦争への危機感から市民各層に及んでいった平和運動の潮流の中に生まれた動きだったといえる。その意味では岩井自身の反戦・平和の意識においても教団自体の戦争協力の過去や戦争責任に対する自覚的な捉え直しははまだ生まれてはいなかったといえる。

以上のような意味での平和運動への問題意識から始まりながらも、学部・大学院を通じて進歩的な聖書学を専攻する中で、岩井の問いは先ず教会とキリスト教の教説への批判的な問いかけに発展していった。その中でもとくに赤岩栄との出会いから岩井は深い示唆を得た。岩井は同志社の学生同士の交友の中で、四学年先輩の笠原芳光を通じて、赤岩が主筆となり編集者でもあった雑誌『指』を知って、その購読者になった。『指』は1950年12月の発刊からすでに第54号を重ねていたが、岩井は54号からの読者となった。

当時、赤岩は教団上原教会牧師でありつつ、その秀でた宗教・文化批判の文筆家としてキリスト教界を超える関心と評価を得ていた。一方でバルト神学に依拠してキリスト教は永遠にかかわる絶対の認識とし、他方でマルクス主義の唯物史観を歴史の認識として、両者には矛盾はないとする二元論的思想に立っていた。日本共産党を支持して牧師のまま共産黨員となるという入党宣言をして、教団との軋轢を生じていた。その後も赤岩は思想的転換を潜り、ブルトマンの非神話化の立場をとって聖書の批判的理解を進め、『キリスト教脱出記』においてキリスト教信仰を離脱すると表明するにいたった。『指』はそれまでの赤岩の思想的転換を発信する場だった。

岩井は赤岩のキリスト教批判に深く共鳴しながらも、必ずしも全面的信奉者とはならなかった。岩井は、キリスト教という存在を思想として批判的に把握する側面が不可欠であるとしても、同時にキリスト教は教会という人間の共同性を伴った存在である点をけっして見逃がさなかった。赤岩の思想的批判に深く触発されつつ、岩井は彼自身が抱いた批判を、教会への参与を通じて、その共同性の変革に生かそうとする姿勢を保っていたといえる。岩井は、「エペソ書の教会論—その真理契機と体得契機—」と題する修士論文を書いているが、その関心は教会の共同性を担うメンバーである人間に注がれていた。同論文は、エペソ書の文体の構造分析から同書が意図した真理契機としての教会論が読み手、すなわち教会を形成するメンバーにどのように体得されるかを論じている。当面する現実の社会的課題に関わりながら、同時に教会の共同体形成を担うメンバーに視座をすえてキリスト教のあり方を自己批判的に考えるという、岩井のその後の宣教につながる姿勢を示唆していたといえるだろう。

3. 教会と反米軍基地の平和運動

3-1. 反基地平和運動との連帯

岩井は1958年に同志社大学大学院神学研究科を修了し、同年、小林溢子と結婚した。小林溢子は恵泉女学園を卒業後、岩井文男の開拓伝道地だった岐阜県の蘇原伝道所の日曜学校を応援するべく蘇原中学校の英語教師に赴任した女性だった。溢子との結婚によって、岩井は家庭を得るとともに、もっとも良き理解者・協力者を得た。岩井の最初の赴任教会は、教団広島流川教会だった。伝道師として招聘され、そこで同志社以来のキリスト者平和の会の活動を続けた。原水爆禁止運動がその中心的活動であった。赤岩との交流は続いており、広島流川教会の在任中、

共産党候補の応援に広島に駆けつけた赤岩が岩井を訪れることもあった。岩井は、1960年から1965年まで呉山手教会牧師及び山手幼稚園園長として在任した。教会からの招聘にあたって、岩井は赤岩の推薦を受けているが、当時の呉山手教会は赤岩の共鳴者である会員と必ずしもそうではない立場の会員があったという。岩井はそれら双方の会員に面識があり、またその人柄に信頼を得ていた事情もあって、牧師としての招聘を歓迎されたようである。岩井は赴任すると「呉キリスト者平和の会」の創設に中心的役割を果たして平和運動を積極的に続けた（小林 2008 p.3）。

呉山手教会を1965年に辞任すると、岩井は岩国教会牧師及び岩国幼稚園園長に就任した。同教会牧師として1978年まで職務を担いつつ、米軍基地撤去を求める岩国反米軍基地闘争に参加した。岩井は「岩国キリスト者平和の会」の前任者杉原助牧師⁽⁵⁾などの働きを継承し、当初、「社・共・地区労・キリスト者」の四者共闘に加わって、革新政党・組合運動との共闘を軸とする反米軍基地運動を展開した。しかし、次第に組織中心の柔軟さを欠く社会運動の限界を感じて、キリスト者と社会運動との連帯という課題を再考し始めた。一般に戦後の社会運動に参加した市民は革新政党の政治運動・労働組合運動に結びつき、その支援なども受けながら、次第に自立的な社会勢力に育っていったといわれ、岩井たちキリスト者の運動もまた時代の流れの中で、次第に自らの運動の主体的な実践を必要としていると考えるに至った。

岩井が市民の闘いのあり方に新たな理解を深めていったのは、「ベトナムに平和を市民連合」（ベ平連）の岩国反米軍基地闘争との連帯関係を通じてであった。岩国の反米軍基地闘争は1970年には、ベ平連の反戦運動に連動して行き、既存の反体制社会運動と一線を画してベトナム反戦の一点を共有課題として、党派や組合などの集団ではなく、個としての市民の連帯を重んじる思想に立って人々の間に共感を広げた。その

連帯は基地内反戦米兵との国籍を越えた共闘をも含むものだった。岩井は戦争反対・反基地の意見表明や街頭行動、米軍反戦兵士の支援など、積極的に反戦・反米軍基地闘争に関わった。岩井はその経験を通じて組織的思想統一で成員を囲い込む当時の既存の社会運動と、個別の課題に応じて自由意思に基づいた個人同士の連帯を重んじる市民主体の社会運動との違いを深く理解したのである。

そのような運動の経験と共に、岩井は社会運動における人間の連帯の思想を深化していった。それは「GI」と呼称された下級兵士との出会いの体験によってもたらされた。GIとは米軍において官給品を意味する government issue が兵士の意味に転用された略称であり、当時の米軍内での兵士の処遇を象徴していた。ベトナム戦争においては、これらGIがもっぱら米軍内部の反戦抵抗者となった。戦況の泥沼化と共に米軍兵士の間には厭戦・反戦の動きが拡大し、日本各地の米軍基地でも兵士の暴動や脱走が頻発した。岩国米軍基地では、1970年1月に米兵士の反戦機関紙『Semper FI』が発刊され、反戦運動が公然化した。基地外では岩国ベ平連の米軍向け反戦放送が3月に開始された。

岩井は米兵への支援活動として、米兵の求めに応じて集会活動の場として教会を提供するなどした。「岩国教会では、長老会の討議を経て会場を提供し、地区の教会有志がこの会の準備等、陰の力になって支えている。多い時は二十人ぐらい、少ない時は七～八名のGIがやってくる。」(岩井1970 p.63)と記している。また、軍法会議にかけられた反乱兵士の要請に応じて牧師として裁判傍聴の支援を行い、良心的兵役拒否を志願した兵士を自宅に宿泊させるなど、反戦運動の連帯を築く中で個々の米兵との人間的出会いを育んだ。そこで、岩井は貧困等の背景から入隊せざるをえなかった境遇の兵士や、殺戮の戦場に駆り出された葛藤や苦悩の中にある兵士の、生の人間に触れた。

それらの経験を通じて、岩井は、それまでの自分の運動が、生きた

人間よりもキリスト者の倫理観に基づく観念を先行させる立場だったと自省するようになった。岩井は次のように述べている。「また、キリスト者のわれわれは、『戦争責任告白』で指摘されたように、日本帝国主義のアジアへの侵略に加担してしまったという罪責からこの施設としての基地をとらえた。基地の存在を許すことはベトナム戦争の加害者になることだ、ふたたびあやまちをくり返すな、というのがスローガンだった。…（筆者注：基地の存在の問題性はとらえている点を評価しつつ）…しかし、そこにははじめから基地を位置づける思考や観念が先行している…どんなに倫理的視点からとらえたとしても、基地そのものを対象化してとらえているという点で、やはり基地を施設としてしまっているのではないだろうか。わたしたちの運動に即していえば、確かに、基地の中にいる兵士たちに呼びかけてきたが、その呼びかけが、わたしたちの倫理的要請（戦争の加害者となるな）の結論だけを語るものであるならば、基地をある一つの観念でとらえてしまっている。」（岩井1971 pp.75-76）。

以上のような省察に立って、岩井は人間の連帯の思想に、個としての人間を見つめ、その尊厳を承認し、他者への共感に根差す精神性を求めるようになった。「GI運動へのかかわりを、単なる支援活動として、自分の射程距離に位置づけてはならない。みずからのかかわる反体制運動（靖国、入管、沖縄、被爆者、公害等々）が規制された観念であることをやめて、自分の感情にまでなっているのかどうかを再検討させるのが、わたしにとってのGI運動へのかかわりなのである。」（岩井 1971 p.79）。

また、岩井には、社会運動の事柄をけってその事柄のみに還元しないという姿勢が見出される。「GI運動が示しているものを、遅足ではあるが、この町に立てられてすでに数十年になる教会において、深い問いとして受けとめていきたい。GI運動が提起しているものを、日本の

近代や、そこに形成されてきたキリスト教固有の場で問いかえしていく作業が、これからの課題だと思っている。そしてその作業を放棄して、GIたちとの連帯はない。」(岩井 1971 p.84-85)。岩井はその省察を教会の宣教の文脈でとらえることを怠らなかった。

岩国教会時代の平和運動の経験から、岩井は社会運動的宣教を支える教会形成の基盤として、主体的な個と個との連帯を通じた共同性の形成が欠かせないと確信するに至った。それが観念的に陥る脆弱さを孕む社会運動的宣教を活性化すると考えた。教団が1966年に「社会活動基本方針」によって表明した社会活動への宣教論的指針について、岩井は思惟構造の問題を次のように指摘した。「神学的課題から現実問題を照射していくという構成の仕方で… (中略) …観念と現実との逆転が起きます」(岩井 2003 p.1)。観念からの思惟構造に拠るかぎり、教会の宣教活動は市民の社会的活動に接点を持ちえないというのが岩井の指摘だった。なぜなら市民の運動は理念やスローガンから生まれるのではなく、人間生活の個々の現場から生まれるからである。岩井はこの人間の生の現場の事実を真摯に受けとめることが先行しなければならないと考えたのである。

その視座から、岩井は「信仰告白共同体」という信念集団の属性をもつ教会を振り返った。信仰告白の考察から、「自覚的告白主体が歴史の中で具体的に働いている、その事実こそが信仰の告白において見落とされてはならない大切な点である。特定の概念による教義の無条件承認を絶対視する発想においては、その事実が省みられない。とすれば、そこには統一やイデオロギー的一致を見た同志があったとしても、主体と主体とがふれあう連帯は生まれえない。そのような発想をもって、教会はどのようにしてこの歴史の中で連帯を生み出す力となるというのか。…自らの頽廢と闘うことのみが連帯への試行である」(岩井 1972 p.96)と主張した。教会は、その属性から信念的一体化を図り観念的に出来事

や人間を捉えやすい。その結果、個々人の尊厳と主体性を軽視する危うさをもつ。社会生活の現場と具体的な個々の人間を重んじて宣教に携わる姿勢は、岩井の宣教の靈性となり思想の根幹となった。

3-2. 宣教への新たな展望としての『教団戦責告白』

岩井の西中国教区での平和運動・反基地運動への関わりは18年間余りに及んだ。彼はその宣教の実践を省察して、戦後の教団は二つの問題を直視しなければならないと考えるに至った。第一は第二次世界大戦下の教団の戦争責任の問題であり、第二はそれに関わって教会の信仰的正統主義の教会論的位置づけの批判という問題であった。

第一に教団の戦争責任の問題に関して、岩井は積極的な取り組みを試みた。平和運動と反基地闘争に関わってきた岩井の言説からは、戦後の日本国家が、米国に従属しつつ、かつての軍事侵略をなぞるようにアジアへの侵略に加担して行く姿への批判がうかがわれる。そこにはアジア・太平洋戦争における侵略の責任や反省を示す姿勢を認め得なかったであろう。その国家の方向に対して、岩井は、それを黙視してはならず、戦後の教会が隣人と連帯できる共同性を目ざすならば、教会自らの戦争責任を明確にすべきだと考えたのである。岩井は次のように回想している。「戦争責任のことを教団としてやってもらわないと、僕らは現場で伝道は出来ない、日本基督教団の教職にはなりましたが、このような教団で、日本の世に仕えることが出来るのかと痛切に感じたのです。私がいた岩国は米軍基地があり、米軍の犯罪がどんどん起きている現場でした。…その中で、どうしても、教団で戦争責任ということに取り組んでもらわねばいけないと考えていました」(岩井2007『福音と世界2007年12月号』pp.30-31)。岩井が日本基督教団の戦争責任の告白を主張したのは、その成否が戦後教会の宣教の真実を問う意味で決定的なことだと考えたからだった。

岩井が切望した教団の戦争責任告白という考えは、当時の教団において過去の大戦への反省を抱く人々の共通の願いでもあった。岩井は、1966年、第17回日本基督教団教師講習会に参加し、そこで戦争責任告白の取り組みが不可欠だと訴えた。講習会に参加していた大塩清之助、内藤協、山岡善郎、渡辺泉などの教職者が岩井の主張に共鳴し、講習会校長鈴木正久が彼らの訴えを受けとめた。賛同した教職有志は『第二次世界大戦下における日本基督教団の戦争責任の告白』（以下『教団戦責告白』）を起草し、教団総会の決議とすることを目ざした。告白文の本文は東京の教師たちで作り、関西方面の教師たちが総会提案の前文を作成ことにした。岩井や渡辺は前文作成に着手し、1966年第14回教団総会において渡辺泉が建議者となり、岩井は賛同者の一人となった。しかし、総会では議案を採択するに至らず、教団常議員会に付託となった。この件に対処する教団五人委員会で困難な調停が図られ、1967年、教団常議員会の決議ではあるが、議長鈴木正久の名前による公表となった。『教団戦責告白』の公表は岩井の宣教の働きを大いに鼓舞した。1965年からの岩国米軍基地反対闘争は次第に激しさを増し、岩井の回想では、「最も激しいのは1970年から1971年」の時期だったという⁶⁾。『教団戦責告白』は、その闘争の途上になされたことになる。基地の町で市民の反基地平和運動と連帯する岩井にとっては、『教団戦責告白』は、いまだ十分ではないとしても、キリスト者と教会の主体的な闘いの根拠を表現した言葉であった。しかし、岩井は、社会体制と闘う市民に連帯するような取り組みが教団全体として容易に進むとは楽観していなかったことが窺われる。『教団戦責告白』公表の直後に、岩井は、『教団戦責告白』への参加は「個人の信仰と決断にまかされている」と指摘し、「人間の尊厳を守る使命をどれだけ遂行するか」は、「各個教会のレベルで、これがどれほど教会の体質になるか否かである」と論じている（中国新聞1967）。岩井の指摘は、その後の教団諸教会の停滞的な状況を予見した

指摘となった⁽⁷⁾。

第二の問題は教会の信仰的正統主義への批判の問題だった。先の新聞論説で岩井は次のように述べた。「『戦争責任の告白』が、ざせつを単なる悔いや自己反省において超克するのではなく、信仰という営みの本来にまで立ち帰って、このざせつせる者にもなお使命が、という「愛とゆるし」を信ずるところから出発していることは、そこに芽ばえる思想の形成に、座標の設定をおのずからせしめるものであろうと期待しうる」。ここで岩井は『教団戦責告白』の神学的意味を問い始めていたといえるだろう。この指摘は、戦責告白の戦争否定、非暴力、平和の願いが、いったいどのような福音理解に立脚し、また、どのような福音理解を導き出すのかという神学的問いとなっていった。それは信仰的正統主義を標榜する教団教会の存立の意味を問う問いだった。

3-3. 教会の体質改善とは何か

信仰的正統主義への問いは、岩井にとって、教会における「聖書の読み方」を変革する課題に焦点化していった⁽⁸⁾。日本のプロテスタント教会の社会的性格と信仰的正統主義から来る伝統的体質を考えれば、それらを内部批判し、克服することは強靱な忍耐力を要することであったと思われる。そのステップを岩井は「聖書の読み方」を変革する課題として踏みだしていった。それは教会の体質改善という戦後教団の歴史的な課題に踏み込んでいくことを意味した。

教会の体質の改善という課題への岩井の取り組みが本格化するの、岩国教会牧師の後半期から始まり、1978年以降の神戸教会牧師時代を通じての時期だったと思われる。教会の体質改善を考えると、岩井の問題意識の中心にあったのは、聖書の読み方の問題だった。それは彼自身が教義主義的な聖書の読み方から、ブルトマンの実存論的解釈や田川建三のマルコ福音書研究を媒介として探求してきた神学生以来の課題で

もあった。民衆の生の現場と教会に関わる宣教者としての経験を通じて、岩井は模索してきた批判的・歴史的解釈に基づく聖書の読み方を教会の自己変革の道筋として選択したといえるだろう。

この時期、岩井にとって杉原助がよき対話者となった。岩井はブルトマンの聖書学に造詣の深い杉原との対話を通して宣教の思想を掘り下げたという（岩井2003「教会と聖書－あとがきに代えて、思いつくままに－」pp.263-264）。岩井は次のように述べている。教団を始め日本の教会は、「日本のプロテスタントの信仰受容が教義的に正しくなされているにも関わらず」、近代日本国家に対して教会の主体性を持ちえずに従属を重ねてきた体質を持つ。その要因は一体何か。天皇制国家の絶対支配の強さのみで説明できるのであろうか。岩井は「そのような外発の要素とともに聖書の読み方によるものではないかという示唆を与えられました」という。岩井は杉原の示唆を手掛かりに日本の教会の体質について次のように理解を深めていった。「聖書を教義的には読むが、聖書を歴史文書的に読み、聖書を生み出した教会（初代の個々の原始教会）が直面した問題を、我々が今出会っている現在の問題との相関関係で読む読み方を通して学ぶことをしてこなかったことにも大きな原因があるのではないか」というのであった。

岩井は、1978年、教団西中国教区を離れ、兵庫教区神戸教会牧師に転任した。神戸教会は西日本最古のプロテスタント教会であり、この転任は基地問題などの最前線にある宣教の現場から、繁栄する大都市の大教会への転任だったので、一面では岩井の宣教姿勢の後退を印象づけるであろう。しかし、岩井自身は彼が認識を深めてきた宣教の課題に取り組む新たな機会が到来したと考えていたと思われる。それは日本の教会の抱える第二の問題、信仰的正統主義への批判にかかわる取り組みとしての聖書の読み方の問題であった。神戸教会は大都市の大教会だけに日本プロテスタントの歴史的課題を様々に内包する教会であったともいえ

る。その意味では岩井は神戸教会において、彼が積年批判してきた日本プロテスタント教会の伝統的体質と福音理解の双方の問題に真っ向から直面することになった⁽⁹⁾。

4. 共に生きる教会の宣教の課題—結語—

岩井の牧師職前半期18年間の宣教活動を振り返ってみると、岩井が教団教会の戦後宣教に不可欠と考えた根本的課題は三点に集約された。第一は戦争責任を担う営みを礎とした教団教会の宣教の形成という課題であった。岩井にとって、教団教会の課題とは『教団戦責告白』の示す言説を単に理念として語るのではなく、実践のための方向を示すものとして活動の中に用い、平和構築の働きを担うことを意味した。第二に彼が重要と考えた課題は、教団の歴史を踏まえた正統主義的信仰告白の教會的位置づけを批判的にとらえなおすという課題であった。それは、批判的聖書学を真剣に受けとめ、真摯な対話と多様な信の立場を包括し得る共同性を持つ共同体に刷新することを意味した。第三に前述の二つの働きを担い得るキリスト者として、自由でありつつ責任的である人格的主体を形成する課題であった。岩井の積極的な平和運動への参与は、福音の示す人格的主体の喚起に依って、キリスト者としての歩みを担おうと試みた軌跡だった。

岩井は、個の人格的主体性を呼び覚まされた人間として、人間相互の尊厳を認め合う共同性に根差して社会運動を宣教の働きとして受けとめ、教会を形成することをめざす姿勢でキリスト者であることを生きる霊性を育んだ。そのようにして岩井は、市民運動と連帯する社会運動的宣教の経験と省察を通じて、日本のプロテスタント教会を歴史的反省に立った平和の宣教の担い手として変革する方途を模索し、具体的な実践を重ねた。他方で日本の教会が市民運動を担って闘うまでに自己変革で

きるのは、キリスト者と教会の内的闘いを伴うと考えていた。岩井は、日本の教会が市民運動と連帯する可能性を開くには、キリスト者と教会自らの信仰理解の変革が必須と考え、批判的聖書の読み方の必要を認めた。そこに個として主体性をもって生きるキリスト者と教会の信仰の形成を期待したのであった。

しかし、日本のプロテスタント教会が市民的社会運動と連帯できる宣教を担うという望みは、今日に至るまでの日本宣教史において、必ずしも広く実現しているとは認め難いだろう。ただ、確かなことは、少なくとも岩井自身は、西中国教区で形成した社会運動的宣教の思想と霊性を、その後も岩井の基本的姿勢として貫いていったことである。西中国教区を離れておよそ30年あまり後の2007年に岩井は次のような回想を語った。

将来の展望は思いを述べるにとどめる。教会は概念や観念体系の閉鎖性が先行する教理を、歴史的文脈での検証なしに宣教の働きや教会の共同性の根拠とすることを再検証しなくては「右傾化」と戦えない。歴史学としての聖書学の成果を受け入れ、差別、抑圧、貧困、排除の現実にある弱者としての民衆と共に生きる視点を持って、聖書の読み方の変革を成し遂げるならば、世界の民衆の教会と連帯できる希望が与えられるのではないか。(2007体感としての右傾化とキリスト教 p.17)。

将来の展望は思いを述べるにとどめると、岩井は語ったが、そこには、この言説を語った時点での教団教会の現状を踏まえた、岩井の道半ばの思いが込められていたと思われる。岩井が、その宣教者としての営みから指摘し注目を促した社会運動的宣教の諸課題は、まだ確たる未来の相貌を予測できないでいた。しかし、同時に岩井は、その課題の克服や希望となりえる展開は、なお次代の課題でもあることを示唆したのであ

る。

注

- (1) 岩井健作は群馬県の旧組合派安中教会員に始まる四代に渡るプロテスタント教徒の家系で、父岩井文男は、同志社大学に学び、銀行員、日本基督教団教師、同志社大学教授、新島学園高校長・同女子短期大学長などを歴任して伝道者・研究者・教育者の生涯を送った。母牧江は変遷久しい生涯を送った文男の良きパートナーとして五人の子どもを育てた。
- (2) 岩井は、2002年3月に神戸教会牧師職を退任し鎌倉市に転居した後に、教団川和教会、単立明治学院教会の牧師を務めた。同時に東日本大震災被災者支援活動や脱原発市民運動に加わり、「鎌倉に震災銭湯を作る会」の共同代表を務めるなど、新たな社会活動を担った。また教団に関わっては、北村滋郎牧師の教師免職問題に関して「北村滋郎牧師を支援する会」によって教団保守化批判の論陣を張り、「沖縄から米軍基地撤去を求め、教団『合同とらえなおし』をすすめる連絡会」の代表世話人を務めるなど精力的に活動している。
- (3) 岩井の思想形成は円環的であると共に、その思想表現は運動と教会の流動する現場からの状況的発言である。それらのほとんどは教会の週報、キリスト教雑誌などを主として長年に渡り数多く蓄積されてきた。岩井は、その一部を『兵士である前に人間であれ－反基地・戦争責任・教会－』（2014）として刊行した。筆者は同書の編集を担当したが、岩井の言説としては未刊の史料も数多い。現状の文書史料の不備を補うために本稿では岩井本人、関係者からの聞き取り調査を部分的に採用している。
- (4) 岩井家の山羊の飼育は健作に任されたが、彼は隣家の農民が県の取用に応じて手放した農地の青麦がブルドーザーで踏み潰される予定を知って、その麦を刈ろうとしたことがあったという。しかし、持ち主の農民が気づき「おれは地上物件まで売ったおぼえはない」と岩井を叱責した。彼は「取り返しのつかない悪いことをした、と思いました。その農民のやるせない思いに気がつかなかったのです。自分の『罪』を知り、愕然

として、地に頭をつけて『神様許してください』と祈りました」と述べている。さらに先の山羊が事故死したことがあった。岩井のつなぎ方が悪かったために斜面に足をとられた山羊が首を吊った状態だった。家族を支えた贈り物の山羊の死であり、「なんとも言えない罪責の思いに襲われ…『我らの贖いとなりたまえり』という言葉が身に染みしました」と回想している（2005地の基震い動く時—阪神大震災と教会—pp.199-200）。この体験は、キリスト教的表現をもって、岩井が社会と歴史における現実的な人間関係の意味を読み取ろうとした言説とも解していいだろう。

- (5) 当時、杉原助は岩国東教会牧師だった。陸軍幼年学校・陸軍航空士官学校に学び、戦後、キリスト者となって日本神学専門学校（現東京神学大学）を卒業し教団教師となった。ブルトマンの『ヨハネ福音書』などの翻訳者として知られている。赤岩栄が牧師を務めた上原教会会員で雑誌『指』の読者であったが、岩井もまた同雑誌の読者だった縁から親しい友人となった（岩井談）。
- (6) 筆者からの以下の質問に対する岩井健作本人の電子メール（12：17/2012/01/30）の答えによる。質問（大倉）「米軍基地反対闘争に参加されたのは岩国の時代でしょうか？」。答え（岩井）「『米軍基地反対闘争』は岩国教会牧師に赴任してからの1965年～1978年。最も激しいのは1970年～1971年です」。
- (7) 岩井は、教団教会の停滞の実状に関して後年回想した彼の表現で言えば『教団戦責告白』をめぐる「運動論的限界」だったと批判している。岩井は「運動的限界」の内容を以下のように述べる。「戦責告白というのは、告白をすればそれで終わりではなく、そのあとどのように、告白を担う主体として歴史に関わり、過去の歴史の罪責を告白しながら、現在の問題として担っていくかということが大事なのです」（岩井2007『福音と世界 12月号』p.35）。しかし、その理解と営みが、教団全体として、また個々の教会において十分に共有されなかったと総括する。「しかし、『告白』の文言の完結性とは裏腹に教会の現実には、社会体制への批判はおろか、社会から疎外されている人々や問題への関心すら弱いものです」（岩井2003「教会と聖書—あとがきに代えて、思いつくままに—」pp.263-264）。

- (8) しかし、その後の教団の実状は岩井の期待に応えるものではなかった。後年の岩井の表現では『教団戦責告白』の「神学的限界」が露わになっていった(岩井2007『福音と世界 12月号』p.32)。岩井の指摘した第二の問題は、次第に『教団戦責告白』が告白する戦争否定、非暴力、平和の願いが、いったいどのような福音理解に立脚し、また、どのような福音理解を導き出すのかという神学的問いとして明確になっていった。それは信仰的正統主義を標榜する教団教会の存立の意味を問う問いであったと言っていいだろう。
- (9) 岩井は、聖書の読み方から教会の福音理解の刷新をはかるという課題は、神戸教会でこそ担わねばならないと考えた。赴任の初年度から岩井は神戸教会の伝統的な集会「夏期特別集会」を聖書の読み方というテーマに集中した。岩井自身が講師を務める年もあったが、1978年から2001年に至る講師には、木田献一、橋本滋男、佐竹明、荒井献、大貫隆、宮谷宣史、勝村弘也、青野太潮、高橋敬基、桑原重夫、佐藤研など、いずれも現代聖書学の成果に立って批判的に聖書理解を深めるアプローチの講師を招いた。批判的な聖書の読み直しを教会で育てるという姿勢が一貫していた。岩井は礼拝説教においても批判的聖書の読み方に基づくメッセージの展開に努めた。岩井が在任中そのラディカルな姿勢を追求することができたのは、神戸教会の牧師としての岩井に対する教会員の信頼も大きな要素だったであろう。

引用・参考文献

- 赤岩栄 1971『赤岩栄著作集 第7巻』教文館。
- 岩井健作・他／日本基督教団西中国教区宣教研究会編 1968『洗礼を受けてから』日本基督教団出版局。
- 岩井健作 1970「基地をゆさぶれ—岩国からの報告—」『月刊キリスト 1970年9月号』日本基督教協議会文書事業部。
- 岩井健作 1971「我が内なる体制—子供の叫びを黙殺すまい—」『月刊キリスト 1971年7月号』日本基督教協議会文書事業部。
- 岩井健作 1972「PEACE・ヘイワ・平和」『月刊キリスト 1972年3月号』日本基督教協議会文書事業部。

- 岩井健作1973「岩国に住む一個からの行動一」『福音と世界 1973年5月号』新教出版社。
- 岩井健作・来間高夫1977『18年の軌跡—岩国キリスト者平和の会の歩み1959～1977—』岩国キリスト者平和の会。
- 岩井健作1992「『合同のとらえ直し』の基底」『福音と世界 1992年3月号』新教出版社。
- 岩井健作1994『聖書を歴史的に読む』大阪キリスト教書店。
- 岩井健作1995「被災地の一隅から」『福音と世界 1995年4月号』新教出版社。
- 岩井健作1995「被災地の一隅から その2」『福音と世界 1995年10月号』新教出版社。
- 岩井健作2000「教会形成の苦闘と喜び 大倉一郎『河原の教会にて—戦争責任告白の実質化を求め続けて』」(書評)『本のひろば 2000年10月号』財団法人キリスト教文書センター。
- 岩井健作2002「子どもの死の意味を考える」『子どもの文化 34(1)』21~28。
- 岩井健作2003「教会と聖書—あとがきに代えて、思いつくままに一」神戸教会伝道部委員会編『土の器に盛られたいのちの言葉—聖書をどう読むか—』日本基督教団神戸教会。
- 岩井健作2003「イエスはキリストではない 笠原芳光『イエス 逆説の生涯』」(書評)『福音と世界 2003年4月号』新教出版社。
- 岩井健作2004「コメント」(「特集 『十字架』と『復活』をどう生きるか」)『福音と世界 2004年10月号』新教出版社。
- 岩井健作2005『地の基震い動く時—阪神大震災と教会—』コイノニア社。
- 岩井健作2005「『求め、すすめる連絡会』とは」『福音と世界 2005年12月号』新教出版社。
- 岩井健作・渡辺英俊2005「草の根の『解放の神学』を訪ねる」(対談)『福音と世界 2005年1月号』新教出版社。
- 岩井健作2007「発題 地震で問われた教会と地域の関係—日本基督教団の場合(公開シンポジウム(第57回キリスト教史学会大会)阪神淡路大震災における教会)『キリスト教史学 61』6~12。
- 岩井健作2007「所与としてのキリスト教」『よく生き、よく死ぬために』関西神学塾。

- 岩井健作2007「体感としての右傾化とキリスト教」『福音と世界 2007年8月号』新教出版社。
- 岩井健作・他2007「このとき、歴史に向き合う（前編）—戦争責任告白をどう生きるか—」（「特集 再び戦責告白を問う」）『福音と世界 2007年12月号』新教出版社。
- 岩井健作2008「“教師退任勧告決議”批判と克服をめぐって」『福音と世界 2008年2月号』新教出版社。
- 岩井健作2009「戦後、『問題提起』を受けっぱなし」『福音と世界 2009年2月号』新教出版社。
- 岩井健作2010「教会とは何だろうか」（発題）『福音と世界 2010年7月号』新教出版社。
- 岩井健作2011「ベトナム戦争と岩国市民」吉本秀子『科研研究成果報告書 基地と岩国市民』山口県立大学国際文化学部吉本秀子研究室。
- 岩井健作2011「1995年被災者から2011年被災者へ」『福音と世界 2011年05月号』新教出版社。
- 岩井健作2012「原発事故を受け止めて」社会福祉法人新生会『公開シンポジウム 東日本大震災と原発事故—独日平和フォーラムとの対話—』新生会。
- 岩井健作2012「岩井文男と賀川豊彦の農民福音学校」『賀川豊彦学会論叢 20号』賀川豊彦学会。
- 岩井健作2012「危機の時代に真剣に聖書を読む 新免貢・勝村弘也『滅亡の予感と虚無をいかに生きるのか 聖書に問う』（書評）『本のひろば 2010年7月号』財団法人キリスト教文書センター。
- 岩井健作2013「日本基督教団『改訂基礎理論第一次草案』を読んで」関西神学塾（講義原稿、未刊）。
- 岩井健作2014『兵士である前に人間であれ—反基地・戦争責任・教会—』ラキネット出版。
- 岩井文男1984「回想」新島学園女子短期大学新島文化研究所編『敬虔なるリベラリスト 岩井文男の思想と生涯』新教出版社。
- 「沖縄を知る事典」編集委員会編2000『沖縄を知る事典』日外アソシエーツ株式会社。

大門正克・他編2010『高度成長の時代2 過熱と揺らぎ』大月書店。
木原滋哉2011「反戦・反核・反基地—広島・岩国ベ平連の場合—」日本平和学会 2011年度秋季研究集会報告。
高橋武智2002『私たちは、アメリカ兵を越境させた……ベ平連／ジャテック、最後の密出国作戦の回想—』作品社。
鶴見良行2002『ベ平連 鶴見良行著作集2』みすず書房。
土肥昭夫2004『日本プロテスタントキリスト教史』（第5版）新教出版社。
中川六平2009『ほびっと 戦争をとめた喫茶店 ベ平連1970-1975 in イワクニ』講談社。
日本キリスト者平和の会編1991『キリスト者の戦争責任と平和運動』かもがわ出版。
日本基督教団神戸教会編1992『近代日本と神戸教会』創元社。
林博史2012『米軍基地の歴史—世界ネットワークの形成と展開—』吉川弘文館。
道場親信2010「ゆるる運動主体と空前の大闘争—「六〇年安保」の重層的理解のために—」「年報日本現代史」編集委員会編『六〇年安保改定とは何だったのか』現代史料出版。

新聞・ウェブサイト・会報

岩井健作1967「キリスト者と戦争責任」『中国新聞』五月二八日朝刊六面。
岩井健作2011「『二つの回路』を明確にしながら歩み続ける 渡辺英俊『虹を追って—ある牧師の五十年』」（書評）『キリスト新聞』10月1日号2面。
小林紀由2008「わが国キリスト者の平和運動と憲法、靖国問題—「呉キリスト者平和の会」の資料調査より」『精神科学』日本大学哲学研究室, 43号, pp.17-28（所収：http://jugyo10sr-kobayashi.at.webry.info/20100/article_10.html 9:27/2012/01/30.）。
日本基督教団神戸教会1995, 1996『神戸教會々報』。